声のノックと自分の存在感が患者さんの環境に及ぼす影響

私は患者さんの病室に入る際に「コン、コン」と口に出しながらノックをして病室に入ります。

ある時、患者さんに「いつもコン、コンって言いながら入ってくるね、なんで？」と笑われました。私は「ノックの音だけだと誰が来たかわからないから、僕が来たよって分かるように声を出しているんです」と説明しました。するとその患者さんは笑っていたのですが、それを聞いた後に真顔になって、「だから〇〇さんが部屋に来た時は怖くなかったんだ」と言われました。自分の中で印象に残っているエピソードの一つです。

看護師が患者さんの病室を訪れる際にドアをノックすることは当たり前のことですし、ノックをせずにドアを開ける方もいないと思います。また、入院して病室で休まれている方はカーテンを閉めていることが多いです。誰でもそうだと思いますが、疾病状態になると不安になったり、色々なことに敏感になったりするものではないでしょうか。そんな時にドアをノックされて、「誰か分からない人が部屋に入ってきた」と感じるのと、ノックと同時に「コン、コン」と声が聞こえて、「私が来ました」とアピールしながら病室に入ってくるのとでは、患者さんの安心感・不安感の軽減という意味で大きな差が出てくると感じています。

ちょっとしたことですが、精神科の病棟ではこんなことを考えながら日々看護しています。

ナイチンゲールが言う「環境」とは、物理的環境だけではないと考えています。看護師は人的環境（患者さんを取り巻くご家族にとどまらず、患者さんの医療に携わる医療従事者すべてを含んだ意味での人間関係の環境）も整え、考えていく必要があると思います。また、精神科看護においては、「自分自身が『ケアの道具』となる」と教科書にも書いてあります。

看護師のその瞬間の在り方一つで、患者さんへ与える影響も変化します。自分自身が療養環境の一部となる精神科看護を一緒に考えていきませんか。